

51 日露戦争期の広島予備病院の患者を取り巻く環境

—本院と分院の比較—

坂村 八恵¹⁾, 岡本 裕子¹⁾, 隅田 寛²⁾, 千田 武志³⁾¹⁾広島国際大学看護学部, ²⁾広島国際大学保健医療学部, ³⁾広島国際大学非常勤講師

これまでわれわれは、日清戦争および北清事変期、さらに日露戦争期の広島予備病院における医療と看護について研究を続けてきた。その結果、日清戦争と北清事変期の医療においては、日清戦争期の戦傷病者はほとんどコレラを中心とする伝染病患者と脚気患者によって占められていたが、北清事変期には脚気患者はあいかわらず多いものの伝染病患者（特にコレラ）が減少し、レントゲンの早期導入により切断手術が皆無となったことが判明した。また看護については、日清戦争で日本最初の軍事施設における看護婦の活動が実現し国民の評価を高めたこと、北清事変で全国から日本赤十字社救護班が派遣できるようになり、はじめて外国人傷病兵の看護をしたことなどを指摘した。

日露戦争は、これまでの戦争とは比較し得ない程、規模が大きく期間も長く、それだけに死傷者も多く発生した。このように激戦を反映して重症者を多くかかえながら広島予備病院が業務を遂行できたのは、衛生知識の普及、臨時似島陸軍検疫所の早期稼働、病理分析、レントゲンの広範な活用、手術法の改良、看護婦の雑用からの解放など業務の改善と、その結果として伝染病の中でも特に致死率の高いコレラ感染者をはじめとする病者の割合を著しく減少させたことによる。ただし、日清戦争以来、多くの患者を記録した脚気は、日露戦争においても6万9921人(31.2%)を占めるなど未解決のまま残された(ちなみに呉海軍病院の脚気患者は2名と報告されている)。

こうしたこれまでの研究にもとづいて、2011年度の広島医史学会において看護面に焦点をあて「日露戦争期の広島予備病院における患者を取り巻く環境」と題して発表した。その結果、患者が生活する病室は、常に清潔で室温も一定に保たれていたこと、衣服は、下土以下でも1週間ごとに寝衣交換がなされるなど清潔に保たれていたこと、食事は、症状によって細かく分類されており栄養に配慮されていたこと、その他、入浴が可能な患者は毎日、不可能な患者は1日1回から2回の清拭が行われていたこと、散歩は、可能な限り許されていたことが判明した。こうした状況は、日清戦争や北清事変と比較すると著しい進歩と言える。しかし呉海軍病院では、上陸場から病院までが近距離であること、病室を毎日3回掃除するなど清潔面が徹底していること、食事の献立が西洋食や麦飯を採用していることなど、患者に対する配慮がより徹底していたことが分かった。

これらの結果は、広島予備病院の本院と呉海軍病院に関する資料を分析して得られたものであり、日露戦争期の患者を取り巻く環境としては比較的恵まれていたことが予想される。そこで本報告では、広島市内とその周辺に開院された7分院を対象に前回と同様、患者が生活する病室、衣服、食事、日課などについて具体的に実証し、そして広島予備病院の患者を取り巻く全体の様子を解明したい。

参考文献

- 1) 『明治三十七八年戦役広島予備病院業務報告書前編』明治40年(陸上自衛隊衛生学校所蔵)
- 2) 日本赤十字社『明治三十七八年戦役日本赤十字社救護報告書』明治41年(博物館明治村所蔵・日本赤十字豊田看護大学保管)